

題目

「自己志向・他者志向エゴグラム MIE と基本的構えおよびストレス反応の関連」

著者

西川和夫* *三重大学

分類

統計的尺度特性研究

掲載誌

「三重大学教育学部研究紀要」(三重大学)1995年 第46巻(教育科学) pp.119 - 130

問題および目的

交流分析の自我状態理論に基づき、自我状態の活動に供給される心理的エネルギーの方向に自己志向と他者志向の2次元を導入したエゴグラム・モデルが提案され(西川 1993a)、質問紙形式の自己志向・他者志向エゴグラム MIE (新称 IUE) が試作された(西川 1993b)。エゴグラムに設定された機能的自我状態下位尺度は、自己志向次元で ICP (自己志向支配的親)、INP (自己志向養育的親)、IA (自己志向成人)、IFC (自己志向自由な子ども)、IAC (自己志向順応した子ども) の各機能に対応する。他者志向次元の機能的下位尺度は、UCP (他者志向支配的親)、UNP (他者志向養育的親)、UA (他者志向成人)、UFC (他者志向自由な子ども)、UAC (他者志向順応した子ども) である。試作エゴグラムの因子構造、および機能的自我状態下位尺度と基本的構え (Life position) 尺度 (杉田 1988) の対応関係が、理論的予測を支持することもおおむね実証された。しかし「試作 MIE」の下位尺度は2次元志向性モデルの理論に適合する構造を示していたものの、機能的自我状態次元においても心理的エネルギー志向性次元においても、異なる因子軸への重複負荷が見られる項目を含んでいた。本論文の目的の一つは、理論的な2次元志向性機能的自我状態モデルにいっそう適合するような、因子的独立性の高い尺度項目を精選すること、および精選された項目による機能的自我状態下位尺度と基本的構え尺度の対応関係を再度確認することである(研究1)。また自我機能とストレス関連行動の間に有意な関係のあることが報告されている。第2の目的として、エゴグラム下位尺度とストレス反応・ストレス・コーピング行動の対応関係について、従来モデルに含まれない自己志向的・他者志向的自我状態の関与を分析しようとする(研究2)。

研究1

<方法>

被験者：大学生および社会人 513 名 (男 178 名、女 335 名、年齢 18 ~ 59 歳)。

自己志向・他者志向エゴグラム：「試作 MIE」の項目を一部改訂し、「MIE (1)」と表示した質問紙検査を作成、実施した。

基本的構え尺度：杉田 (1988) の OK グラム検査の質問項目を用いた。

実施期間：1994 年 1 月。

因子分析：自己志向尺度と他者志向尺度それぞれについて、五つの自我状態機能を確認するため項目間相関を求めて主因子解を適用し、バリマックス回転を行って直交因子行列

を求めた。あわせて五つの機能的自我状態次元ごとに、自己志向機能と他者志向機能を分離するための、主因子分析と因子軸のバリマックス回転を実施した。

自己志向・他者志向下位尺度と基本的構えの対応分析：MIE (1) の下位尺度得点とOK グラム下位尺度の相関係数を算出した。

<結果>

MIE (1) の項目特性と因子構造：自己志向次元の因子構造は、ICP の 1 項目、IA の 2 項目および IAC の 2 項目は想定した自我状態機能を代表する因子への負荷が低い、あるいは他の機能的自我状態因子への負荷が高いという因子的複合性を示した。IA 因子は寄与率も 3.83% と低い。その他の項目群は、おおむね仮定された自我状態因子への負荷量が高く他の因子への負荷量が低く、明瞭な因子パターンを示している。他者志向エゴグラムは、UNP の 2 項目、UFC の 4 項目および UAC の 1 項目が因子的な曖昧さを示すが、その他の項目は仮定を支持する因子負荷パターンを呈している。各機能的自我状態ごとの心理的エネルギー志向性次元の因子構造は、CP において ICP の 1 項目、NP において UNP の 2 項目、FC において IFC と UFC の各 2 項目、AC において IAC と UAC の各 1 項目が負荷量が低かったり他因子への重複負荷が見られたりする。A については、自己志向因子軸と他者志向因子軸の分離が十分でなく、明瞭な 2 因子構造が得られなかった。

MIE (1) の機能的自我状態下位尺度と基本的構えの関係：MIE (1) と OK グラムの下位尺度は予測通り INP と I+ (自己肯定) の間 ($r = .662$)、IAC と I- (自己否定) の間 ($r = .624$)、UNP と U+ (他者肯定) の間 ($r = .390$)、UCP と U- (他者否定) の間 ($r = .476$) に、他尺度との相関より高い相関値が観察された。しかし、他者肯定および否定の構えと UNP および UCP の対応は中程度の相関値に止まっている。

<考察>

因子構造：CP 機能に配置された ICP 尺度と UCP 尺度は機能的自我状態次元においても志向性次元においても、おおむね良好な因子負荷パターンを示している。NP について、INP 尺度の因子的単純性は高いが、UNP 尺度項目の一部に因子的重複が見られる。UNP の 2 項目を改訂することによって、より明瞭な機能的分離ができると思われる。A 機能については、IA 尺度も UA 尺度も志向性次元の分離が明確でなく、大幅な項目改訂を必要とする。FC 機能に属する IFC と UFC では、IFC の因子負荷パターンは機能的自我状態次元でも志向性次元でも独立性の高い特徴を示すが、UFC は他因子への重複負荷を示す項目が複数あり、やや曖昧さを残している。AC 機能に関して、IAC と UAC の項目に他因子への重複負荷が見られ、因子的単純性が十分保たれていない。全体として自己志向エゴグラムと他者志向エゴグラムの下位尺度因子は、理論モデルにおおむね対応した因子構造を示している。しかし当該因子軸への負荷が低かったり他因子への重複負荷が見られたりするので、項目の改訂精選を行って、さらにモデル適合性の高い尺度構成を試みる必要がある。

基本的構えとの関係：OK グラムの下位尺度と MIE (1) の下位尺度間の相対的な相関値の

高さは、弁別的な尺度間対応を示すパターンであった。しかし他者に対する構え尺度と他者志向尺度の関係はやや弱く、また、肯定的構えと否定的構えも必ずしも一次的対極にはないので、基本的構えと自己志向・他者志向エゴグラム下位尺度の対応は多義的であると考えられる。

研究 2

<方法>

被験者：大学生 393 名。

実施期間：1994 年 1 月。

自己志向・他者志向エゴグラム：試作 MIE（西川 1993b）を使用。

ストレス反応尺度：新名ら（1990）の心理的ストレス反応尺度、CMI 健康調査票（金久・深町 1972）等を参考にストレス反応測定質問紙を作成した。

ストレス・コーピング尺度：ラザラスら（1991）、マクナブ（1991）等を参考にストレス・コーピング行動測定質問紙を作成した。

分析：ストレス反応尺度とストレス・コーピング尺度への回答に対してそれぞれ主因子解による因子抽出を行い、因子軸のバリマックス回転を実施した。得られた因子尺度得点と試作 MIE の下位尺度得点との相関を求めた。

<結果>

ストレス反応尺度の因子構造：初期結果に基づき項目精選を行い、平均負荷量が .600 を超える単純構造を示す 4 因子が得られた。それぞれ「人より自分は劣っているような気がして、悲しくなる」など 10 項目で構成される「抑うつ因子」、「話や行動にまとまりがない」など 8 項目で構成される「思考力低下因子」、「前日の疲れがとれず、朝方からだるい」など 5 項目で構成される「身体症状因子」、「人に対して、よくいらいらする」など 4 項目で構成される「不機嫌因子」である。

ストレス・コーピング尺度の因子構造：初期結果に基づき項目精選を行い、平均負荷量が .600 を超える単純構造を示す 4 因子が抽出された。それぞれ「おしゃべりをする」など 9 項目で構成される「人間関係的対処因子」、「スポーツで気分をすっきりさせる」など 5 項目で構成される「活動的対処因子」、「プラス志向でものを考える」など 4 項目で構成される「認知転換的対処因子」、「疲れていると感じたら無理をせず、休養をとる」など 4 項目で構成される「休養的対処因子」と考えられた。

自己志向機能的自我状態とストレス反応およびストレス・コーピング行動の関連：IAC はストレス反応の「抑うつ」と .784 と高い正の相関を示し、「不機嫌」、「思考力低下」ともそれぞれ .448、.427 と中程度の正の相関を示す。対照的に INP は「抑うつ」と -.472 の相関がある。他の機能的自我状態尺度は、ストレス反応と低い程度の相関関係に留まる。ストレス・コーピング行動とは、INP と「認知転換的対処」の間に .509 の相関が見られ、対照的に IAC は -.478 の相関値である。他に .300 を超える相関関係は ICP と「活動的対処」の間 (.324)、INP と「人間関係的対処」の間 (.342)、「活動的対処」との間 (.305)

に見られる。

他者志向機能的自我状態とストレス反応およびストレス・コーピング行動の関連：ストレス反応との関連は、UCPが「不機嫌」との間に.457の相関値を示す他は、いずれも低い相関関係に留まる。ストレス・コーピング行動との関連では、UNPが「人間関係的対処」と.561、UFCが「人間関係的対処」と.514、「活動的対処」と.393の相関値を示す。他の相関関係はいずれも低い値である。

<考察>

自己志向機能的自我状態のストレス関連特性：INPの自己に対する保護的・養育的な自我機能は、否定的で防衛的な反応を退けるように働いている。また「認知転換的対処」との比較的高い相関値は、ストレス状況にあってもその事態の認知を積極的対処や肯定的な意味付けに変換することが容易であることをうかがわせる。一方IACはストレス反応全体と関連があり、特に「抑うつ」反応との関係が強い。ストレス・コーピング行動では「認知転換的」対処と負に相関する。自己否定的で防衛的なIACの自我機能は、不快で混乱したストレス状態に陥りやすく、状況の認知を柔軟にストレス回避的に転換することが難しくなるように働いている。むしろ自己の解決可能性を値引いて悲観的・否定的にとらえる態度に固執する傾向が強いことを示す。ICPは「活動的」なストレス対処と弱い関連があるが、IAとIFCはストレス反応ともストレス・コーピング行動とも関連が低い。適応的機能とは独立した自我機能を反映する測度になっているようである。

他者志向機能的自我状態のストレス関連特性：ストレス反応の「不機嫌」と強く関連するUCPの他者支配的自我機能は、他者への不満・攻撃的なストレス感情を招来しやすくと考えられる。一方でストレス・コーピング行動とは関連が薄い。ストレス反応と関連がなく「人間関係的」ストレス対処行動と強く関連する他者養育的なUNPは、他者とのくつろいだ良好な人間関係を形成し、ストレス対処を容易にすると思われる。UFCはストレス状況に対して「人間関係的対処」、「活動的対処」を行う傾向を示す。この自我状態の機能は、他者との気軽な人間関係形成や活発な活動性を容易にし、ストレスに対する有効な対処行動をもたらすと考えられる。UAとUACはストレス反応にもストレス・コーピング行動にも強い関連を示さない。自己抑制的・他者順応的なUACの自我機能がただちにストレス関連行動に結びつくわけではないことを示している。他者との関係に順応するための、一種の消極的適応機能になっていることをうかがわせる。

結論

自己肯定的な構えと関連するINPと他者肯定的構えと関連するUNPは、いずれもストレス回避や対処に有効な機能的自我状態であることを示す。自己否定的な構えと関連するIACと他者否定的構えと関連するUCPは、いずれもストレス反応親和性があつたりストレス対処困難を示す機能的自我状態になりやすい傾向が見られた。「自由な子ども」であるUFCも、ストレス対処に有効な機能的自我状態であった。

(要約者：西川和夫)